

これからの幸せ 第7回 in 広島

2024年4月30日(火) JMSアステールプラザ大ホール | 主催 浄土宗 後援 中国新聞社

第一部 講演

山中伸弥
(京都大学iPS細胞研究所名誉所長、教授/
京都大学iPS細胞研究財団理事長)

第二部 座談

サヘル・ローズ(俳優、タレント)
西村宏堂(アーティスト、浄土宗僧侶)
戸松義晴(浄土宗総合研究所副所長)※コメンテーター
笑い飯・哲夫(漫才師)※司会進行



父が背中を押してくれた「医学の道」(山中さん)

第一部は、iPS細胞の開発に成功し、2012年にノーベル医学・生理学賞を受賞した山中伸弥さんの講演です。「私を医学の道に導いてくれた2人の恩人がいます」と山中さんは語り出します。1人は東大阪市で町工場を営んでいたお父様。山中さんが中学生の頃、お父様は仕事中に金属片が太ももに刺さったことを端緒にC型肝炎を発症。肝硬変で衰弱していくお父様の姿に接し、山中さんは医学への道を強く意識します。お父様も「お前は町工場の経営より、数学や理科が得意

だから医者になれ」と背中を押してくれました。やがて神戸大学医学部に進み、卒業の翌年、入退院を繰り返したお父様は58歳で亡くなりました。強い無力感に襲われた研修医の山中さんは、「父のように、治らない病気に苦しむ人を救いたい」と、臨床医から研究者への転身を決意します。



幸せに繋がる2つのキーワード(山中さん)

幸せに繋がるキーワードとして、山中さんは「人間万事塞翁が馬」と「VW」を挙げます。大阪市立大学大学院医学研究科に進んだ山中さんは、2人目の恩人・三浦克之先生のもとで研究を重ねますが、ある実験結果が予想と全く違ったことに大いに驚き、これが山中さんの研究人生を大きく変えます。「なぜ結果が違ったのか」が学位論文のテーマになったのです。まさに「人間万事塞翁が馬」。思わぬことが巡り巡って後々のチャンスになることを、山中さんは様々に経験します。後のiPS細胞研究も、予期せぬ実験結果を突き詰めることで大きく進展したと言います。

その後、山中さんはアメリカのグラッドストーン研究所に留学。当時の所長ロバート・マレー先生に「人生や研究の成功の秘訣を教えよう」として学んだのが、2つ目のキーワード「VW」です。Vは「Vision」、Wは「Work hard」です。「確たる目標(Vision)を定め、そこへ向けて仲間と共に一生懸命頑張る(Work hard)。そのこと自体が『幸せ』だと思っんです」。たとえうまくいなくても、そこは『人間万事塞翁が馬』、次に大きなチャンスが来るとして、iPS細胞の研究所と財団の活動に努めていきたい、と述べました。



「幸せに気づくために、上じゃなく下を向こう」(サヘルさん)

第二部の座談は俳優サヘル・ローズさんのお話から。イランの孤児院で育ち、8歳のとき養母と来日し苦労を重ねたサヘルさんは、映画や舞台で活躍の傍ら、人権など様々な支援活動にも取り組んでいます。サヘルさんは、育てのお母様から様々な教えを得ました。例えば『普通』は人間の数だけ存在する。大切なことは、自分の価値観を押し付けないこと。サヘルさんは解説します。「普通をふりかざすことは、自分が変われないから相手を変えようとしているだけ。幸せは日常の中にいつもあるのに、人は幸せより苦しみを嘸みしめがちだと思うんです」。幼いころ壮絶な戦争を体験したサヘルさんは、その記憶が心にこびりつき、どうしても苦しみが先に立ってしまいます。



「でも、自分と他人の苦しみを比較する必要はない。自分の苦しみを抱きしめ、頑張るのをやめて心に余裕ができれば、他者への優しさも生まれ、道端に咲く小さな花にも幸せが感じられるようになります」「身近な幸せに気づくには、上ではなく下を向いて、大地や自分の影を感じて生きること」と締めくくりました。

自分の幸せは自分で決める(西村さん)

続いて、世界で活躍するメイクアップアーティスト、LGBTQ活動家で浄土宗僧侶の西村宏堂さんが、「これからの幸せ」という、この会のテーマを受けて、「じゃあ今までの幸せって何だろう」と語りだします。結婚して子どもを迎えること、良い大学を卒業して大きな会社に入ること、お金持ちになること…戦争の焼け跡からみんなで一生懸命頑張って、安心、安定の暮らしを求めることが「今までの幸せ」なら、西村さんは「これからの幸せ」は違ってくる。自分のセクシャリティに悩み、みんなが求める「幸せの定義」に苦しんできたという西村さんは、大人になって様々な経験をするうち、「幸せ」の見え方が変わったそうです。いい大学を出たとか、結婚しているとか、取

入が高いとか、結局、理想とすべき「幸せの定義」に執着することが人を苦しめるんじゃないか。これまでの幸せとは「人から見える幸せ」であり、もう賞味期限切れではないか。「我慢は美德」とか「苦労は買ってでもしろ」とか、努力して「幸せの理想」を追いかけるのは苦しくなるだけ。それで頑張らずで倒れたり、自殺したりしてしまっは、元も子もありません。「自分が真に『こうしたい』と思ったことかどうかが大事」と西村さんはいいます。「自分の幸せは自分で決める…たとえ失敗したとしても、それが本当の『幸せ』。社会的成功よりも心の喜びが『幸せ』なんだと、みんなが気づいてきた…今はそんな時代なのではないでしょうか」



「普通」は存在しない

戸松義晴さんがコメントします。「サヘルさんの言われた『苦しみを嘸みしめる』は、仏教の『生老病死』の考えに、『下を向いて生きよう』は『足元を照らす』と言う考えに通じます。西村さんは、幸せの常識を疑い、『自分が決めるんだ』と。これは『あらゆる人々を救うのが仏教』とした法然上人の精神に響き合います。司会の笑い飯・哲夫さんが「この座談のミソは『普通って何?』ですよ」と言うと、サヘルさんは「社会が言う『普通』に押し込められると苦しくなる。自分は自分だから『普通』からはみ出しているんです」。西村

さんは「『<ふつ>という言葉を使うのは歯ブラシの硬さくらいにして下さい」と以前講演で話したら、歯ブラシ会社の社長さんが聴いておられて、『<ふつ>の硬さは国によって違う。だから普通はないんです』と教えてくれました。戸松さんが締めくくります。「ここ広島は世界平和祈念の地。戦争のない世界を創ること…『これからの幸せ』は、そこから始まります」。

